



映画に  
宛てた  
ラブ  
レター

2015・11月号

天見谷行人

## 黒衣の刺客

---

黒衣の刺客

2015年10月2日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

たまには敷居の高い映画もいかがですか？

ごめんなさい、この作品、ストーリーについてはサッパリ分からなかったです。えっ、これでカンヌ映画祭監督賞なの？ 一般ピープルな僕では、あまりに敷居が高い作品だったかしらん？  
まあ、でも頑張って感想書いてみますね。

際立ってたのは、映像の美しさ、そして監督のセンスの良さ、なんですね。

アート系の映画を見慣れてる人にとってはいいかもしれないです。

いにしえの中国、その国土の美しい風景。そして時代劇としての最大の魅力である、舞台装置と衣装の華麗さはさすがです。日本や中国など、永い歴史を持つ国は、やはりその文化の奥深さを感じさせてくれますね。

カメラの前に覆われた、薄いヴェール、絹織物のような質感、それを通して人物と舞台セットが映されます。

人物の隣には燭台があり、ろうそくの火が絹織物のヴェールを通して、

「ゆらっ、ゆらっ」

とするとところなど、なんとも雰囲気がいいんですね。

だから、僕としては、この作品、意外なほど、不満はなかったんです。

上映中は結構、楽しませてもらいました。

ストーリー分かんなくても「まあ、そんなことはイイや」って思わせてくれるだけの美しい絵作り、監督の絵心に説得力があるんですよ。

この映画のいいところはそこなんですよ。

「さすが」って感心してました。

そんで、映画館から自宅へ帰って、改めて、本作のオフィシャルサイトを見てみました。

ここで、ようやく、「ああ、そういうストーリーだったのね」と納得。

物語は現在の中国の唐時代が舞台になってます。

隠娘（インニャンと読むらしい。演じるのは女優のスー・チーさん）は、13年間、親元を離れて、道士に預けられていました。

この道士というのは、日本で言えば、まあ、お坊さまということですかね。辞書で調べると、道教の修行を納めた専門家らしいです。道教の儀式なんかも執り行います。

さて、隠娘は13年預けられていた間に、剣術や武術を叩き込まれ、なんと親が望みもしない、暗殺者、女刺客として育てられるのです。



第68回カンヌ国際映画祭《監督賞》受賞

巨匠・侯孝賢 ホウシャオシェン 監督作品

# 黒衣の刺客

スー・チー

チャン・チェン

妻夫木聡

愛を知り、哀しみがうまれる。

監督：ホウシャオシェン  
脚本：チェン・チン  
原案：チェン・チン  
原題「刺客」  
配給：松竹（株）メディア事業部

www.kokui-movie.com

さて、時代背景なんですが、もともと朝廷の家来だった軍事組織が、やがてその武力にモノを言わせて、勝手にある地域を治め出すんですな。日本で言えば、平安時代に起こった武士勢力の台頭ですね。どこの国もやっぱり、人間、やることは同じなんですな。

やはり地位や権力、金と名声という「欲」が人間を突き動かすのです。

で、物語の舞台となる地域一帯を治める人物。これが暴君と言われる田季安（ティエン・ジアン／演じるのはチェン・チェン）

女刺客、隠娘のターゲットはこの田季安です。ところが、もともと隠娘の許婚はなんと田季安だったのです。田季安を仕留めにかかる隠娘なんですが、どうしても、もと許婚の相手にトドメを

刺すことができない。

刺客として育てられ、「殺す相手に情けは要らない」と体に染み込ませてきたはずなのに。なぜか自分の存在そのものに、疑問を抱き始める隠娘。

そんなとき彼女は日本からの遣唐使で、鏡磨きを仕事とする青年（妻夫木聡）と出会うのです……。

この作品、オープニングシーンでの、白樺林の中に佇む隠娘を映し出したときから、アート系に振った映画だよな、っと直感しましたが。まさか、ここまで凝った絵を作ってくるとは思いませんでした。特に、険しくそびえ立つ中国の山の頂。そこに立つ隠娘と武術の女性師匠のシーン。

息を呑みましたよ。

カメラは遠くから二人を狙います。足元から霧が立ち込めてくる。そしてセリフ。その直後、圧倒的な量の霧が二人を山ごと飲み込んでしまうのです。

まるで、これは黒澤映画。

「あの雲、邪魔だ」で、撮影現場は天気待ち。

「あの家、邪魔だなあ」で、映画に関係のない人が住んでる家を、本当に取り壊しちゃう。住人には映画のために引越してもらおう。そんな数々の黒澤伝説がありますが、 Hou・シャオシェン監督も、やっぱり、こだわってますねえ～。

きっとこのワンシーンを撮るために、どれだけのスタッフが、どれだけ「霧待ち」をしたのか？

あるいは山の麓にフタッフを待機させ、低く”たゆたう”霧を巨大なファンで山の頂上へ、送り込んだのでしょうか？

だったら、その巨大ファンは、いったい何個用意したんだろうか？ といろんな想像ができてしまうのです。

まあ、本作は見る人を選ぶのは確かです。鑑賞するにはかなりハードル高い作品なんですが、映画マニア、Hou・シャオシェン監督ファンの方なら、楽しめるんじゃないでしょうか。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 Hou・シャオシェン

主演 スー・チー、チャン・チェン、妻夫木聡

製作 2015年 台湾、中国、香港、フランス合作

上映時間 108分

予告編映像はこちら

[「黒衣の刺客」予告編](#)

夏をゆく人々

2015年10月8日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

**100%混じりっ気なし、ピュアなジェルソミーナ**

カンヌ映画祭グランプリという言葉につられて鑑賞。正直、う～ん、ビミョーですな～、これは。

普通、映画祭で賞を取る作品というのは、二種類あると思います。

①作品に圧倒的な力があること。

②いままで、誰も思いつかなかった、トンがったアート作品。

\*\*\*

①に関して言えば、多くの観客が納得、感動できる作品であり、多くの人が理解できる、最大公約数でもあり、かつまた、観る人の魂の、深あ～い部分にまで作品のメッセージが届く。そういうあらゆる要素を兼ね備えた作品を、僕たちは平べったく「傑作」と呼ぶのですね。

②に関して言えば、まあ、ハッキリ言って「わかる奴だけ付いてこい」という監督の意思表示が極めて強い作品が多いですね。

もう、ここまできると、ほとんど前衛芸術。われわれはスクリーンで何を見せられてるのか？ さっぱり分かん？！ というケースが多いです。

だけど、そういう作品の持つ圧倒的な美的センス、強烈な個性、アクの強さ。それがツボにハマった人には、もう最強な作品になりますね。その最たる例が、ルキノ・ヴィスコンティ監督の「ヴェニスに死す」などのアート系映画。

さて、本作はこれら①と②どっちに振った映画なんでしょう？

あくまで僕個人の印象としては「どっちつかず」なんですね。

まあ、ストーリーはちゃんとしてますしね。



主人公ジェルソミーナの一家はイタリア、トスカーナ地方の田舎で、養蜂業を営んでいます。お父さんは性格も天然なら、作る蜂蜜も天然。混じりっ気なしの蜂蜜にこだわっている、ちょっと頑固な人です。商売っ気があまりなく、近所に住む、商売上手な畜産業の親父さんとは好対照です。

ある日、この村に、テレビ番組のロケーション・クルーがやってきます。

番組はイタリアの地方を巡って、いろんな特産品を紹介し、一回ごとにその土地のチャンピオンを決めようというもの。もちろん賞金もあります。

ちょうど、ジェルソミーナの家には、行政の方から、蜂蜜の製造施設を衛生面に考慮してリフォームするように、という勧告が来ておりました。リフォームには、かなりのお金がかかる。そこでジェルソミーナは、父親には内緒で、こっそり、このバラエティ番組への申し込みをしてしまうのですが.....。

お話としては難解ではなく、ずいぶん分かりやすい。ならば、圧倒的な感動や、あるいは、とてつもない才能を感じさせてくれる映像美、はたまた、新たなる表現の地平線を切り開く、なあって、大げさですが、そういうところが、あるか？ といえば、これがイマイチなんですね。ただ、本作のオフィシャルサイトを見てみると、監督は、まだ本作が二作目。新進気鋭の女性監督さんなんですね。

う〜ん、俄然応援したくなったぞ。

ええ加減なもんですな、観客というのは。

でもね。まだ若い監督さんが、これから、いろんな映画を作れる、そういうチャンスや、自由な創作活動を絶対に応援してあげるべきだと思います。

本作では、イタリア、トスカーナ州、その海辺の風景をバックに、古代の遺跡跡で収録が行われるテレビ番組のシーンがあります。

番組のヒロイン、司会進行役がモニカ・ベルッチさん。

先日観た「サイの季節」では、リアルタッチで、シリアス。政治色も強く反映され、かなり衝撃のシーンの連続でした。

その女優さんが、本作では、低俗極まりないというか、サイケデリックというか、アホみたいなゴテゴテ、キラッキラの被り物付き衣装で登場するというのは、なんとも面白い趣向です。そんな役をOKしたのは、経験豊富なモニカ・ベルッチという女優が、この若い監督さんを盛り立てよう、としているからでしょう。それは父親役の俳優さんもそうでしょうし。

そして、本作のとおきのおきのヒロイン。ジェルソミーナ役のマリア・アレクサンドラ・ルング。



4年の第67回カンヌ国際映画祭で見事グランプリを受賞。以降、世界中の映画祭に招待され、大きな注目を浴び、[ ]がいよいよ日本公開される。1981年生まれの弱冠33歳、イタリアの女性監督アリーチェ・ロルヴァケルの長編映画によって、彼女はそのみずみずしく卓越した才能が高く評価され、一躍世界の新世代を代表する存在となった。緑あふれるイタリア中部・トスカーナ州周辺の人里離れた土地で、昔ながらの方法で養蜂を営む一家の物語。ジェルソミーナ、自然との共存をめざす父ヴォルフガングの独自の教育と寵愛を受け、今や父よりもミツバチに精通している。家族は自然のリズムで生きてきたが、夏、村にテレビ番組「ふしぎの国」のクルーが訪れ、一家がひとりの少年を預かった頃から、日々にさざなみが立ちあ



と緑あふれる大地のもと、ある家族の心模様をこまやかに描いた。まったく新しい、しかしどこかノスタルジックで豊饒な作

撮影当時、若干11歳。

本作でいきなり女優デビュー、しかも主役、という大抜擢。

この少女の持つ、カリスマ性。顔立ちをみてください。この人、古代ローマ帝国の彫刻が、そのまま21世紀の現代によみがえったかのような雰囲気を持っておりま。実に神秘的な雰囲気を持った少女です。

カンヌでグランプリをとった作品の主演女優ですよ！！

これから先、彼女はどうするんだろう？ えらいことになってきましたね。

僕としては、[「クジラの島の少女」](#) で主役を演じたケイシャ・キャッスル・ヒューズさんみたいになったらいいなあ～。日本で言えば、子役から大人になっても活躍している、多部未華子さん、はたまた宮崎あおいさんのような.....。

子役さんで成功しても、そのあと成長するにつれ、徐々に人気落ちてくる俳優さんが多いのですが、そうならないように、本人、周りとも、ぜひ見守ってあげてほしいものです。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 アリーチェ・ロールバケル

主演 マリア・アレクサンドラ・ルング、サム・ルーウィック

製作 2014年 イタリア、スイス、ドイツ合作

上映時間 111分

予告編映像はこちら

[「夏をゆく人々」予告編](#)

マイ・インターン

2015年10月30日 [ミント神戸](#) にて鑑賞

マイヤーズブランド、あなたも一着いかがですか？

ナンシー・マイヤーズ監督作品であります。もうこの人、一つのブランドを確立してますね。ヒューマンドラマ、家族、そして何よりも「恋愛もの」を描かせたら、極上の作品を生み出します。僕、個人としては「[ホリディ](#)」が大のお気に入り。

泣き虫な男性にはオススメの逸品です。

さて、本作の主人公、ジュールズ（アン・ハサウェイ）

ファッション業界で注目を浴びる、今が旬の女性社長。彼女には、仕事を理解してくれている住き夫がいて、愛する娘もいます。

最初は彼女ひとりが、自宅のキッチンで始めたネット通販。

しかし彼女には、特別な才能がありました。

これからヒットするであろう、オシャレな服を見極め、適切な批評をし、コーディネートする、という彼女オリジナルの能力です。

彼女が運営するサイトは口コミで広がり、女性たちの心をわしづかみ！

あれよあれよと言う間に、ジュールズが始めた会社は、200人以上の従業員を抱える巨大企業に成長。

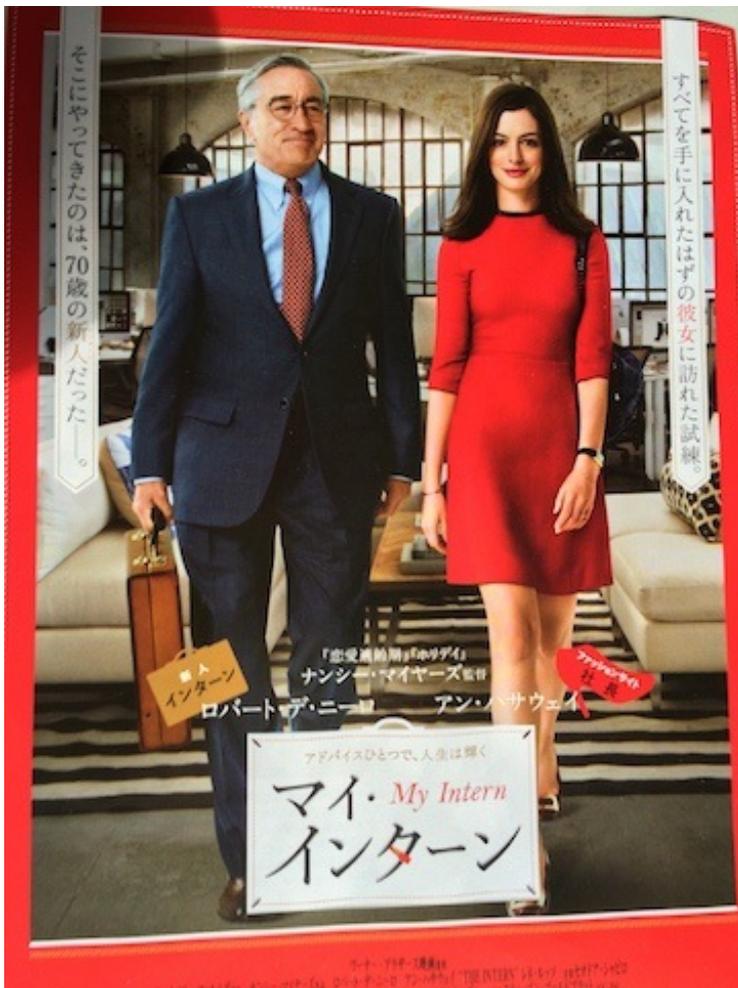
新しいことにトライし続ける企業風土もあって、この度「インターン（研修生）制度」を導入しました。

そこで採用した”新人”インターンは、なんと御歳70歳の男性。彼と、ファッションリーダーである、若き女性社長との、ちょっとギクシャクしたやり取りを、ユーモア溢れるタッチで描いてゆきます。

いつも思うんですが、本作に限らず、ナンシー・マイヤーズ監督のタッチは「品がよろしい」の一言に尽きると思います。

映画作品の中に、不必要で過剰な「エロ」とか「グロ」を、持ち込まないのです。本作のストーリーの流れでも、実はもっと「刺激的」な表現にできるシーンがいくつもあるんです。でも、あえて、そういう過剰演出は一切やらないんですね。

本作では、女性社長を演じる、アン・ハサウェイのファッションに注目です。カジュアルだけど、上質さを感じる素材の良さとデザイン。更に、彼女の「着こなし」をより引き立たせるのが、高齢者インターン（研修生）ベン（ロバート・デ・ニーロ）の「大人のおしゃれ」なんですね。まさに、寸分の間もありません。



ビシッとキメた、ネクタイとスーツのコーディネート。トラッドで申し分なし。こうなると、映画の中に出てくる小物たちも気になる。ベンが持っているアタッシュケースや、手帳、筆記具の類に至るまで、かなりこだわり抜いたものを使っています。しかも、それらにあえて執着を見せないそぶりを見せるのが、ベンの「オ・ト・ナ」の所作なんですね。

いい感じに年齢とキャリアを重ねてきた、ステキな高齢者の見本のような人物。これはやはり、ロバート・デ・ニーロを起用した、キャストिंगの勝利でしょうね。

そんな、“新人”のベンは、数十歳年下の“ボス”であるジュールズに、実に献身的に仕えます。

その姿は、どこか中世の騎士道のような雰囲気さえあります。

日本には、そのむかし「滅私奉公」という言葉がありました。

ベンは自分の立場を、むしろ楽しんでる雰囲気さえあるのです。

さて、ジュールズが作った会社は急成長しました。

急成長した会社にありがちなこと。経営体制が整わないのです。

そこで、外部からCEOを招いて、経営を健全化させよう、という動きになります。その時、CEO候補と社長であるジュールズが面談をする運びになるのです。

ベンが社長付きの運転手を任されています。

社長ジュールズは面接のため、ビルが運転する車から降り立ちます。

目の前には、見上げるようにそびえ立つ巨大ビル。

この巨大ビルの一室にCEO候補者のオフィスがある。

もしかすると、今日の相手は、海千山千のやり手経営者で、いくつも会社を買っては売り抜けて、大儲けをしているかもしれない。まあ、アメリカの企業社会ではよくある話。（プリティ・ウ

ーマンのリチャード・ギアが演じた青年実業家がまさにこのタイプでしたね)

## ー「プリティウーマン」予告編ー

そんな相手と今から面談です。彼女はジャケットの襟をただし、気合を入れて巨大ビルに立ち向かいます。

ーカッター

次のシーンは巨大ビルのエントランスから出てくるジュールズ。

ほとんど虚脱状態。倒れこむように、お抱え運転手ベンが待つ車の中へ。

彼女が放つ一言。

「あんな奴ダメ」

これで、この話はボツ。

あの巨大ビルの一室でいかなる会話がなされたのか？ それには一切触れない。ジュールズのリアクションだけで、どんな人物と会ったのか？ どんな会話があったのか？を観客に想像させる。

このシーン、金と欲にまみれたCEO狙いの男どもを「エグい」感じで描くこともできる訳です。しかし、そういう風には描かないんです。まあ、ここらあたりが、ナンシー・マイヤーズブランドのストーリー展開なんですな。物語の中に、圧倒的な悪役というものが、ほぼ出てこないんですね。

多忙を極める中、会社経営と家庭を両立させようと、懸命に働く一人の女性、ジュールズの姿。それをアン・ハサウェイという魅力的な女優が演じることによって、本作は多くの女性たちの共感を得るだろうと思います。

『プラダを着た悪魔』の続編が最高の形で実現したとも言いたくなる作品。——FRaU 8月号



すべての女性を応援する、感動のデトックスムービー  
あの『プラダを着た悪魔』のアン・ハサウェイが、  
ニューヨークのファッションサイトの社長に!

蛇足ながら、定年でリタイアした人物を、日本の世の中や、企業、社会は、なぜもっと活用しないのでしょうか？

本作でのベンは、リタイアしたあと、生活に困らないほどの資産を持ち、悠々自適の生活を送っていました。ただ、毎日の太極拳トレーニングや、その他の文化教室、そして、年中行事のようにある「お葬式」への参列。

「ああ、また、仲間が先に逝ったか……」

そんなつぶやきを漏らす毎日。ベンにはそれが嫌だったのです。

自分もまだ何か、世の中の役に立てるかもしれない。

「Facebook」とか「USB接続」なんてハイテク関連の単語はさっぱりわからない。でもまだ、誰かのために役立てるかもしれない。なにより、世の中から、まだ自分は必要とされていたい……

日本でも、もちろんこういった高齢者は、それこそゴマンといることでしょう。

実は高齢者というのは、様々な体験、危機をくぐり抜け、人生の経験値の高いスペシャリストであることも多いのです。

本作でベンは、社長の運転手役になりますが、彼はもともと営業畑の出身。

実は敏腕営業マンを見分ける一つのポイントがあります。

「道に詳しい」ということです。

僕もかつて20年以上営業畑を歩んできました。

ひときわ抜きん出た営業マンに共通する、ある特徴を発見しました。

それは、彼らは車を運転していて、決して「道に迷わない」のです。

ナンシー・マイヤーズ監督が、この「道に迷わない」ベンを描いたのを見て、僕は一人膝を打って納得しておりました。

「やっぱりちゃんと調べてあるんだ」

マイヤーズ監督ぐらいになれば、敏腕営業マンの特徴を見逃すわけではないのです。

当初は高齢者であるベンと、どう付き合っているか、戸惑っていたジュールズですが、やがて彼女にとって、そして会社にとって、ベンはかけがえのない人になってゆきます。

人と企業、会社組織というものの関係。

本作は、ほとんど理想的すぎて、おとぎ話のように思われるかもしれませんが、しかし、映画を仕立てるための「布地」が「厳しい現実」という名の「素材」であったとしても、それをもとに「着心地の良い作品」をつくる自由があっていいはずです。ナンシー・マイヤーズ、ブランド映画は、どれも女性にとって着心地、抜群の逸品でしょうね。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 ナンシー・マイヤーズ

主演 ロバート・デ・ニーロ、アン・ハサウェイ

製作 2015年 アメリカ

上映時間 121分

予告編映像はこちら

[「マイ・インターン」予告編](#)

バクマン。

---

バクマン。

2015年10月16日 [イオンシネマ明石](#) にて鑑賞

これが大根監督の「大バクチ」だぜ！！

最初はね、観に行く予定もなかったんです。でも、監督が大根仁さん、と聞いてちょっとビビッと来たんですね。あの「[モテキ](#)」の監督さんですよ。

これ、「オモロいかも」という感じで見に行きました。

結果。大満足！！

もしかして、これって、今年観た映画の中でベスト5に入っちゃうかもしれないです。

やっぱり、映画ってねえ、何をどう撮ったっていいんですよ。基本、表現は自由なんですから。どうしても、ちょっと映画をかじると、プロっぽくやろう、とか、あの大監督さんの作風でやってみたいと思うわけですよ。

例えば小津映画の様式美は素晴らしい。洋画のアンゲロブロス監督のスケール感は例えようもない。ヴィスコンティ監督の美意識は酔いしれますよね。じゃあ、自分はどんな映画を撮るのか？ 映画監督を志す若者たちは、ぜひ、独りよがりでもいい、自分にしかできない表現を模索してほしいんです。

大根監督はそれを商業映画の中で、どれだけの可能性が示せるのか？ 果敢にチャレンジしている監督さんの一人だと、僕は確信します。

映画の中に、書店のポップアップ広告、マンガの吹き出しみたいなのを入れてもいいじゃない！（たぶんこれを最初にやったのは、中島哲也監督の「下妻物語」だと思う）

本作は、漫画家を志す二人の高校生が主人公。

高木君（神木隆之介）は文章、ストーリーを書くのが得意。同じクラスにいる真城君（佐藤健）は絵を描くのが得意。そこで高木君から提案あり。

「俺、ストーリー書くからさァ、オマエ、画を描いてくんない！？」

そして二人でマンガを作って、デビューしようぜ！！というのです。



最初はあまり乗り気ではなかった真城君。さて、クラスには真城君の憧れの女の子がいます。それが亜豆美保（小松菜奈）さん。圧倒的な美貌とスタイルの良さ。まさしくアイドルです。そんな彼女、実はアニメの声優を目指していることを知った真城君。

「もし、俺が漫画家デビューして、それで、それで、もしだよ、アニメになったら、その時はヒロイン役やってくれる?！」

彼女の答えは.....

「Yes」でした。

「よっしゃあああああ〜!!」

おれは漫画家になってやるぞおおお〜!!」

真城君は高木君と組んで一心不乱にマンガを描き始めます。

「マンガやるなら、頂点めざそうぜ!!」

二人はマンガ界の巨人と呼ばれる「少年ジャンプ」編集部で、やっとの事で描き上げたマンガを持ち込むのです.....

漫画を創作する、彼らの頭の中、どんなアイデア、どんなストーリー、どんな表現をやろうか?

表現者であれば、誰もが経験する、自分一人にしかわからない、実に曖昧模糊とした、ある種の「ゾーン」

それをプロジェクトマッピングという新しい手法で、本作は描いてみせます。彼ら二人の心象風景を、大根監督は、スクリーンで観客に提示することに、見事成功しました。その演出は決して独りよがりではない、と僕は思います。

また、その手法は、のちに二人がタイマン勝負することになる、天才漫画家との熾烈な競争のシ

ーンでも、実に効果的に使われます。

この天才漫画家を演じるのが染谷翔太君。

彼、いいねえ～。

ここまでちゃんと役作りしてくるとは思ってもみませんでした。

以前見た矢口史靖監督の「[WOOD JOB!](#)」では、まだまだ、新人臭さが抜けていない感がありました。

でも本作では、明らかに役者として成長している姿が見られます。

天才にありがちな、ひとりよがり、わがまま、傲慢、クセとアクの強さ。

普段からかなり猫背な姿で、フラフラと歩く若き天才漫画家を、実に巧みに演じました。

それを演出した大根監督。やっぱ、エッジが立ってるわぁ～、っていう感じですね、

矛盾した言い方かもしれないけど、アマチュアなら、大いにひとりよがりだと思います。

しかし、必死の思いで努力して、ようやくプロになった。

マンガを描いてお金をもらう。当然、「読者が面白い！」と思ってもらえるものを描かねばならないわけです。

もう、ひとりよがりでは通用しない世界なんですね、プロってというのは。

さらに、映画の場合もっとアブナイ……。作品に関わる人が格段に多くなるんですね。

映画に出資してくれる支援者は、まだ、完成品が見れないわけです。

「これからつくる」映画作品に大きなバクチを打つわけです。

それは売れる作品なのか？ はたまた、大衆がそっぽを向くのか？ もし、そんなことになったら、もう大赤字。最悪の場合は、監督、プロデューサーは首を吊らねばなりません。売れなきゃ、おしまい「the end」です。

そういう意味で、最近では、大ヒットマンガの映画化が進んでいるのは、出資者への、ある種の「保険」がかかった作品作りとも言えますね。



## INTRODUCTION

原作・大場つぐみ、漫画・小畑健の「DEATH NOTE」コンビが手がけ、全20巻で累計1500万部を超える大ヒットを記録した漫画「バクマン。」が遂に映画化。監督は映画『モテキ』で日本映画の新たな地平を切り開いた鬼才・大根仁。そして、音楽と主題歌を担当するのは気鋭のロックバンド・サカナクション。いま最も熱い才能たちが結集し、少年達の「成長」「戦い」「友情」そして「恋愛」を描いた、爽快感と躍動感あふれる、新新で王道の青春映画が、ここに誕生!!

## STORY

「俺たち二人で漫画家になって、ジャンプで一番目指そうぜ」

ところで皆さん、映画のエンドロールって最後まで見ますか？

僕は本作については、最後までちゃんと見ました。

なんで？

だって、エンドロールまでも面白いんだもん。

こんなに素晴らしいサービスしてくれてるエンドロールなんて、今まで見たことがないです。

1960年代までの映画は、エンドロールなんて、ほんとあっさりしてました。

あるいは、オープニングロールで、先に出演者やスタッフ紹介がありました。

それも、実に短い時間です。

ところが、映画が巨大産業になるにつれ、関わるスタッフの数が、半端なく多くなってきました。

とっぜん、エンドロールも長くなる。

「しょうがねえじゃん」

それが業界でまかり通ってきました。

また、一部の「映画評論家」「映画通」「映画マニア」と称する連中が、この「糞面白くもない」エンドロールを、最後まで見るのが「エチケット」なのだと、いう風潮を作ってしまった。

エンドロールを最後まで見るのが「本当の映画ファン」なあって！！

笑わせるな！！

だから誰も映画館に行かなくなったんだ！

映画を作る側も、最後の最後まで観客をどう釘付けにしようか、という創意工夫を何にもやっつてこなかった。はっきり言って明らかにサボってた。

「エンドロールは長くて当然じゃん」

それが業界の常識。

でも観客の立場からは、まったくの非常識。

こんなつまらん、背景真っ黒、知らない人の名前だけ、延々五分以上見せ続けられるなんて、たまったもんじゃない。こっちはお金払ってるんだからね。

我慢大会やってるんじゃないんだよね。

大根仁監督という人は、本当にサービス精神旺盛な人で、観客をどうやって楽しませようか。あっと言わせようか、ニヤッとさせてやろうか、そんな楽しいことしか考えていない、ちょっとイタリアンな感じの人じゃなからうか。

僕は本作のエンドロールを見ていて、そんな風を感じました。

映画は確かに大バクチです。

でも僕は、あの偉大なスティーブ・ジョブズの言葉を借りて言いたい。

「そりゃあ、失敗する可能性は高いよ、でも僕は一生のうち、一回でも映画を作ったことがあると言えるんだ。それだけで誇りだよ」

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 大根仁

主演 佐藤健、神木隆之介、小松菜奈、リリーフランキー

製作 2015年

上映時間 120分

予告編映像はこちら

[「バクマン」予告編](#)

岸辺の旅

2015年10月18日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

あの世とこの世の境にて

ところで皆さん、お墓参りって最近行ってますか？

僕は今55歳なんだけど、ふと、思いついた時とか、ちょっと気分を落ち着かせたい時など、お墓参りをするようになりました。今までの人生をふりかえって、「あの時、よく、死ななかつたな」と思うような瞬間がいくつもありました。50歳を超えた折に、三回、全身麻酔で手術を受けたことも影響していると思います。

全身麻酔を経験した方なら分かると思うけれど、あれ、麻酔液が注射針を通して（僕の場合はそういうタイプの麻酔でした）体に入ってくるのが分かるんですよね。麻酔液って、ジュワ〜とした感覚で「痛い」のですよ。

おいおい、これ麻酔なのになんで痛いんだよ！と、思った次の瞬間

一暗転一

全く意識を失います。

気がついた時はベッドの上。酸素吸入。左腕には点滴。指先には心拍数を測る器具。一番違和感を覚えるのは、尿道に細く滑らかなガラス管が差し込まれていること。その先を辿って行くと……、まあ、ヤボな話ですね。

そういう体験を僕は3回やってます。

三回目の手術が決まった時、「ああ、そろそろ、あっちへ行く準備しとくべきかな」などと思い、入院前に部屋の整理をやっておきました。

手術の当日、僕が一番嫌だったのは、尿道に管を差し込まれることではなく、あの麻酔液が体に入ってきて、ジュワ〜、と痛くなり、その後「昇天」するような一連の工程、あの感覚を、体と意識が覚えていることでした。

つまりは、人工的に「臨死体験」を無理やりさせられるわけです。

もちろん、病院、医師、看護師など、「切る側」から言わせれば「全身麻酔」の危険性など屁でもない、なのでしょう。でも”まな板の上の鯉”状態の「斬られる側」としては、かなり厳粛な気持ちになるのです。

人工的に意識を失う「その瞬間」

その後、万が一ということがあって、もう自分は「こっちの世界」には帰ってこれないかもしれない。そんな風に思ってしまうわけですね。

そんな訳で、自分と、あの世の世界が、随分と身近に感じられるのです。すぐ隣の席に「死」と

いう相棒が佇んでいる。そんな雰囲気を感じることはあるのです。僕が時折墓参りをするようになったのは、そんな体験があつてからのこと。墓石を水で清め、花を手向け、お線香を焚いて、「もしかしたら、そっちへいくかもしれませんので、その時はよろしく」と手を合わせます。なんだか、ふうう〜っと、心の波が穏やかになってゆくを感じる、その瞬間が僕は好きです。さて、映画の話でしたね。



本作は夫を亡くした奥さん、瑞稀（深津絵里）が、ひょっこり、あの世からトリップしてきた旦那さん、優介（浅野忠信）と、思い出の場所と人を訪ねて旅する話。

こういう手のお話は、ミステリーにも描けるし、それこそ妖怪にも描ける。いろんな手法があります。

本作では、旦那さんを演じる浅野忠信さん。この人の役者としての「素材の良さ」を黒沢清監督がまるで三ツ星シェフのように、料理するんですね。

それは深津絵里さんという女優さんも、一緒。いい素材をいい腕の料理人が、適切なレシピによって作れば、極上の料理が出来上がる。

当たり前のこと、下ごしらえをおろそかにしない。実はそれが一番難しいんだけど、黒沢清監督はやっぱり、いい仕事してますねえ〜。

映画のタッチが初めから終わりまで、全く変わらない。



このお話はファンタジーであるのだけれど、変な特殊効果に頼ろうとはしない。あくまで実写。そして実に巧みな編集で、亡くなった優介が、時には現れ、時にはフッと瑞稀の前から姿を消すのです。

この辺りうまいなあ～。

ストーリーは大変穏やかで、観た後、幸福感や、ちょっとした切なさが残る作品です。ただ、観客の心を鷲掴みにするような、ウムを言わせぬような「迫力」に繋がっていないのが、やや残念。でも、浅野忠信さん、深津絵里さんのファンでしたら、もう、間違いなく本作は「三ツ星」ですよ！

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 黒沢清

主演 浅野忠信、深津絵里、小松政夫、村岡希美

製作 2015年 日本、フランス合作

上映時間 128分

予告編映像はこちら

[「岸辺の旅」予告編](#)

2015・11月号映画に宛てたラブレター

<http://p.booklog.jp/book/101749>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/101749>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/101749>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ